COURRIER JAPON

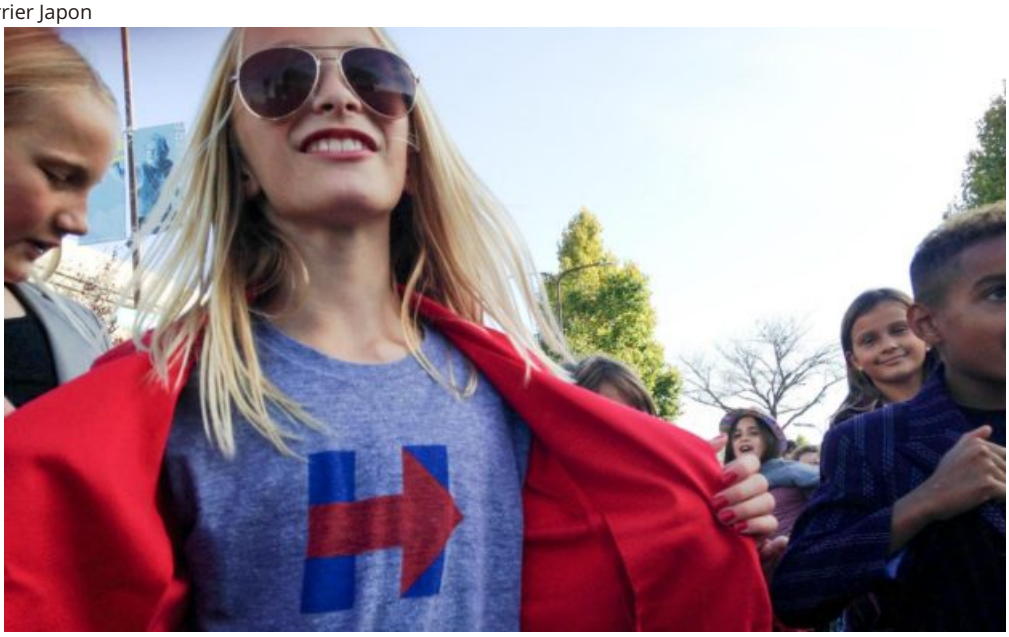
2017.4.13

vol.02　「分断」からの希望　米国の子供たちはトランプをどう見ているのか？｜ケイン岩谷ゆかり

Text by Yukari Iwatani Kane

ケイン岩谷ゆかり　1974年、東京生まれ。米ジョージタウン大学外交学部卒業。1996年にロイターに入り、2006年〜11年、ウォールストリート・ジャーナル記者。15年からカリフォルニア大学バークリー校ジャーナリズム大学院講師。著書『沈みゆく帝国　スティーブ・ジョブズ亡きあと、アップルは偉大な企業でいられるのか』（日経BP社）ほか

Translated by Courrier Japon



テッサ・ローズ・シアーズ（10）のフラッシュモッブ
PHOTO: SAMANTHA CLARK

ウォール・ストリート・ジャーナル記者として、アップル社をはじめとしたテック記事で数々のスクープを出してきたジャーナリスト、ケイン岩谷ゆかりが、トランプ政権下の米国のリアルな日常を描き出すレポート。選挙権のない子供たちは、トランプをどう見ているのか？

「あの人はすんごく悪い人だ」

昨年12月、夫と甥（9）と姪（8）と一緒にシカゴのダウンタウンに行ったときのことだった。私たちは、眩いばかりに輝いているガラス張りの高層ビルの前を通った。ビルの16階部分には「TRUMP」という巨大な文字が誇らしげに掲げられていた。

小学2年生の甥のヘンリーは、98階建てのそのコンド・ホテルをしばらく眺めてから私たちにこう尋ねた。「これって、ドナルド・トランプのこと？」ヘンリーの声は侮蔑的なトーンに満ちていた。

「僕、あの人、大っ嫌い。あの人はすんごく悪い人だ」とヘンリーは言った。

シカゴのトランプホテル
PHOTO: PORTO / WIKIPEDIA

この甥の発言に私は当惑した。何と言っていいか、わからなかった。ヘンリーの意見に共感はできるものの、果たしてそれを認めてしまっていいものだろうか。家族として、私たちはヘンリーに、ひとの良いところを見ることができる人間になってほしいと思っている。

もし、この種の発言をよしとするなら、それはすなわち、自分たちが批判する人たちと同じレベルまで己を貶めることにはならないだろうか。こんなとき、ヘンリーの両親（夫の兄夫婦）は、私たちにどう対応してほしいと思うのだろうか――。

幸い、ヘンリーの妹のエレノアが、私たちを窮地から救ってくれた。「ヘンリー、そんなこと言うべきじゃないわ。彼は悪い人ではなく、ただ誤った選択をしたのよ」

これを聞いて、私は微笑んだ。だがその後、数ヵ月の間にトランプが、移民政策や安全保障政策、メキシコ国境の壁建設、環境政策などに関して次から次へと恐ろしい決断をしていくなかで、私はこの日のやり取りを忘れずにはいられなかった。当の大統領がタカ派で偏狭な視野の持ち主であるときに、親や教師はいったいどうやって、寛容であることや、他者を認め、受け入れる心を教えればいいのだろうか。

ひとを軽蔑することなく

教育の大半を米国で受けた私は経験から、この国の子供たちの多くが思いやりを持ち、寛大で寛容であるよう教わることを知っている。また高校では、優秀な生徒というのは、成績が良いだけでなく、リーダーシップやボランティア精神を発揮することが期待されている。ヘンリーとエレノアの小学校では、教師は生徒た

ちのなかから「親切大使」を任命する。また家庭では、「思いやり深く、落ち着きがあり、礼儀正しく、そして勉強すること」が何よりも重視されている。

エレノアがヘンリーに注意をしたとき、エレノアは、誰か大人が言ったことを真似しているのは明らかだった。のちにその大人とは、私の義理の姉のスーであることが判明する。この一件をスーに話すと、彼女は「そう言うのが、トランプの言動を認めることなく、自分が信じる価値観を伝える最善の方法だと思った」と言った。

スーは、たとえヘンリーの意見に共感したとしても、ひとを軽蔑するようなことを息子に言ってほしくはなかった。「ひとには丁寧に接してほしい」と彼女は話す。とは言いつつも、たとえば「なぜトランプは壁を築くことで、恵まれない人々が米国に来るのを阻止しようとするのか」といったことを説明しなければならなかったときには暗い気持ちになったという。

ヘンリーが政治に関心を持っているという事実は興味深い。そうするにはまだ幼い年齢だからだ。スーの想像するところ、「トランプは学校のいじめっ子と変わらない」とヘンリーは感じているのではないかという。

スーによるとヘンリーは昨年秋、トランプが障害のあるニューヨーク・タイムズの記者の仕草を真似た映像に、とりわけ嫌悪感を示したという。私は、このように敵意に満ちた政策が氾濫するなか、他の子供たちはどう反応しているのだろうかと考えさせられた。

子供版「フラッシュ・モブ」

そこで私は友人の娘のテッサ・ローズ・シアーズ（10）に話を聞いた。彼女は昨年11月、大統領選の投票日直前に、ヒラリー・クリントンを応援する子供版「フラッシュ・モブ」を率いた。「フラッシュ・モブ」というのは、公共のスペースに突然現れてパフォーマンスやダンスをする集団のことだ。

テッサのフラッシュモッブ
PHOTO: SAMANTHA CLARK

テッサは、パフォーマーたちが、クリントンのようなパンツスーツ姿で登場したニューヨークのフラッシュ・モブの動画を見て、それと似たようなフラッシュ・モブをカリフォルニア州バークレーで企画した。

テッサの母親によると、テッサはクリントンの大ファンで、トランプが勝利したと知ったときには泣いたという。テッサはしばらくの間、トランプが大統領であることを認められなかった。

だがいまは自分の信条を守りながらも、トランプが大統領になった事実と折り合いをつけようとしているのだとテッサは話す。「トランプが大統領だからといって、彼に賛成する必要はないわ」とテッサは言う。テッサは大統領選中、「私は彼女を支持する」と書かれたクリントン支持を表明するTシャツを誇らしげに着ていた。そんな彼女は最近、「#抵抗せよ」と書かれたTシャツを買ってほしいと言ったという。

冷静な子供たち

友人でジャーナリストのフレッド・ボーゲルスタインは、トランプが大統領に選出された後、家庭内で15歳の双子の子供たちと話し合いをしたという。

「子供たちは動揺していた。選挙戦中のトランプのいろんな発言を聞いていたし、またそうした発言に友達や教師や親たちが示した反応も見ていたからね。そのうえ私たち親も、明らかに動揺していた。だから子供たちも動揺していたんだ」

こうフレッドは話す。

フレッドと彼の妻は「率直に、だがヒステリックにならずに」子供たちと話したという。2人は子供たちに、自分たち一家は、この先も大丈夫だと伝えた。自分たちは米国市民だし、たいていの問題に対処できるだけの経済力もあり、そして白人だからだと。

ボールドウィン一家。左からフレッド、ベアトリス、エビリン、ベアトリス
PHOTO: YUKARI IWATANI KANE

米国は他の多くの国より人種的に多様ではあるが、この国には「白人の特権」という概念が存在する。つまり白人はマイノリティーにはない社会的特権や優位性を享受しているのだ。フレッドは、このように自分たちが有利な立場にあることはすなわち、自分たちには、恵まれない人たちを助ける「義務」があることを意味するのだと子供たちに言った。

私は先週、このフレッドの子供たちと話した。彼らは、現状に対して驚くほど冷静だった。

だが昨年11月の時点では、フレッドの息子のサムは、トランプの移民政策を聞いて、93歳の祖母が国外退去を命じられるのではないかと気をもんでいた。彼の祖母は、いまでこそ米国の市民権を持つが、かつてはホロコーストを逃れた難民だった。ユダヤ人の若い娘だった当時、ベルリンを逃れることを余儀なくされたのだ。

けれどもいまのサムは大概、ただひたすら腹を立てている。彼は、トランプがマスコミを利用してメディアの見出しに登場することにうんざりし、また単純すぎたり、逆に複雑すぎたりする政治論議に苛立っている。さらに彼は、不法移民の入国を阻止するためメキシコとの国境沿いに壁を建設する政策をとりわけ不合理だと考えている。「乗り越えたり、破壊したり、地下に通路を作れるような壁なんか作るべきじゃない」

とサムは言う。

「**誰かのせいにするのは、やめるべき**」

一方、サムの双子の妹のベアトリスは、感情的になって理性を失ってはならないと強く主張する。フロリダ大学の「米国選挙プロジェクト」によると、今回の大統領選では有権者の59％以上が投票した。だがこれはすなわち、投票しなかった人が数千万人いることを意味する。クリントンの敗北はそんな彼らのせいだとする意見も多い。

しかしベアトリスは、そのことにこだわるのは、そろそろやめるべきだと指摘する。

サム（左）とベアトリス
PHOTO: YUKARI IWATANI KANE

都合が悪くなると、他人のせいしがちな人々の傾向を前に、「いつも誰かのせいにするのはもう、やめないとね。自分たちの怒りにとらわれてばかりいてはいけない。前進しないでどうするの？」と彼女は言う。

ベアトリスは、トランプの予測不可能な言動や不確かな未来に不安を覚えはするが、まだパニックになるには及ばないという。

彼女はまた、トランプ支持者をあざ笑う人たちには共感しない。

「みんな、トランプ支持者は最悪の人たちで、ひどい人間だと思っている。でも本当は、これまで目を向けられることがなかった気の毒な人たちよ。彼らにも、私たちと同じように、意見を言う権利があるってことを理解しないといけないわ」とベアトリスは言う。

それを聞いた私は、米国社会がいかに分断されてしまったかを実感した。私の友人はみな進歩的な思想の持ち主だ。トランプを支持する知人は、5本の指で数えられるくらいしかおらず、トランプが好きな子供は1人も知らない。

ベアトリスによると、彼女の学校はとてもリベラルで、もしトランプ支持者を名乗るような子がいれば、「磔（はりつけ）にされるだろう」と言う。だが彼女は、いわゆる「社会正義の戦士たち」を批判する。彼らは自分とは異なる意見を認めたがらない極端な見解の持ち主だと彼女は考える。

彼らが大人になる日

私はベアトリスの見識と冷静さを尊敬する一方で、この国を引き裂く深い溝を思い、心がふさぐのだった。いったいどうすれば、この国は再び1つになれるのだろうか。私は友人たちと、トランプ支持者のことを「あの人たち」と呼んでいた当時を後ろめたく思った。

ベアトリスは、今後トランプが大きな混乱を起こし得るとも考えており、その際には自分の意見を主張し、できる限りのことをするという。彼女はとりわけ環境問題を懸念しており、貯金の一部を信頼できる組織に寄付するつもりだという。

ベアトリスは数ヵ月前、ノースダコタ州の石油パイプライン建設に反対するデモにも参加した。パイプラインの建設は、地域の水源を汚染し、先住民の居留地にある古い墓地を破壊する恐れがあるとされているのだ。

ベアトリスが友人と一緒に参加した、ダコタ石油パイプラインのプロテスト

テッサもベアトリスもサムも、18歳になったら投票するという。「もしトランプがこの国を破壊したなら、その頃には、私もこの国のために何かできるくらいの歳になっているはずよ」とベアトリスは話す。

私はここ数ヵ月ではじめて、楽観的な気持ちになれた。次の世代の子供たちはいま、「もし人々が政治に関

心を失い、投票しなければどうなるか――」という忘れられない公民教育を受けている。そんな彼らが、「私たちはいずれ、大丈夫になる」であろうことを教えてくれた。彼らが大人になる日が、待ちきれない――。